Architectural Institute of Japan

日本建築学会大会学術講演梗概集
（中国） 2008年 9 月

建築家の思考する曖昧性の概念に関する研究（2）

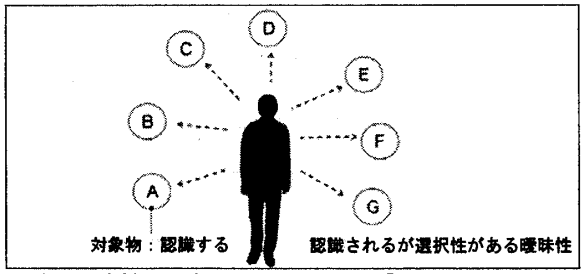
正会員 ○五日市沙央里*
同 山田深**

曖昧性 概念 多様性 不明瞭性 体験 想定

1. 序 前編では、建築家が思考する曖昧性の概念を［明確化－不明確化］［体験想定－体験不想定］という２つの見方から捉えた。本編では、さらにその中で得られた異なる概念の枠組み〈多様性〉〈不明瞭性〉と、《体験想定性》《体験不想定性》の思考（表１参照）について論じ、さらに実体空間や通時的傾向の考察を行う。

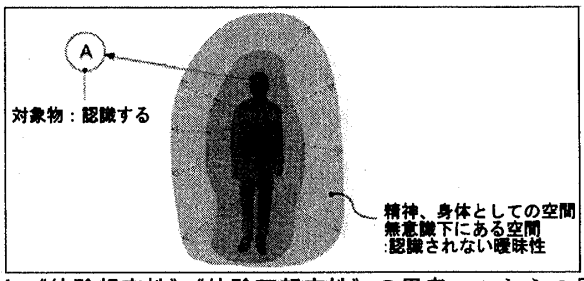
2. 〈多様性〉の概念 ［明確化－不明確化］の軸上の中央で得られた枠組みは〈多様性〉の概念であり、空間の機能に関係する。機能とは、一続きの人間の行動においてある部分の意味を最大化させ、ひとつの代表的な活動とする行為の特定化であるが、この考え方と対照的に〈多様性〉の概念は反機能主義的な思考である。これは空間での行為や活動を１つに規定することなく、使用者に様々な使い方を誘発させ、どのようにも認識できるという曖昧性の概念である。そしてこの概念を思考する建築家は小嶋一浩氏、早川邦彦氏、黒川紀章氏、千葉学氏などであり、空間を多様なものとして捉え認識している。つまり、空間を何かに明確化すると同時に不明確にする思考であり、空間把握を幅広くおこなう概念と言える。

図１〈多様性〉の概念の説明図



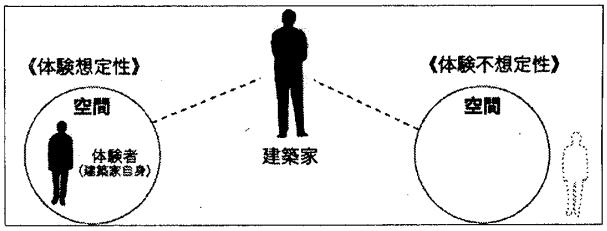
3. 〈不明瞭性〉の概念 この概念は［明確化－不明確化］の軸上で得られたもうひとつの枠組みで、人間の空間認識に関係し、空間を対象化しない極めて曖昧な概念である。この概念の曖昧性は空間が主体に認識されないことによる。つまり人間の心理、主観から事柄を認知しようとする認識論の捉え方に深く関係している。人間の心が何かを真だと見なす志向性により世界が認識されており、主体の意識から空間を認知しようとする立場が現象学であるが、〈不明瞭性〉の概念とは空間を志向しない概念であり無意識の状態の空間概念である。そのため意識を通さない精神や身体そのものとして把握される曖昧な概念であり、空間を認識する〈多様性〉とは異なる曖昧性である。この概念を思考する建築家は坂本一成氏、75-90年代の伊東豊雄氏、篠原一男氏などに代表される。

図２〈不明瞭性〉の概念の説明図



4. 《体験想定性》《体験不想定性》の思考 これらの思考は〈多様性〉〈不明瞭性〉と異なる水準にあり、［体験想定－体験不想定］の軸上で得られた。まず《体験想定性》は建築家自身が意識上で空間を体験している状態であり、空間での目的があることから意図的とも言える。例えば、〈多様性〉の概念である小島一浩氏は、使用者の体験を想定していると思われる。また〈不明瞭性〉の概念の建築家も主体の体験として考えているため《体験想定性》である。つまり、《体験想定性》は建築家が体験者と同一化を測り自身の頭に描いている空間に入り込む状態であり、自身を主体化させて空間を思考する場合《体験想定性》である。それに対し《体験不想定性》は、建築家があえて体験を想定しない思考である。例えば、藤本壮介氏は体験を想定せずにあくまで空間の関係性の創作に主軸を置いていることから《体験不想定性》であると考えられる。また山本理顕氏は、空間を家族や室のように平面的・ダイアグラム的視点から捉えており、特に《体験不想定性》であると言える。

図３《体験想定性》《体験不想定性》の思考の説明図



以上の異なる概念の枠組みが、建築家の把握する曖昧性の違いとして明らかになった。

SPATIAL CONCEPTIONS OF VAGUENESS –A study of architects' theories-(2)

ITSUKAICHI Saori, YAMADA Shin

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

5. 建築界における概念の考察　ここで建築界での曖昧性の概念の特徴を示す。表1を見ると大きく右下から左上に掛けて主に建築家が分布しており、この枠で示される範囲が建築家の思考する曖昧性の概念となる。これは人間が把握できる空間の曖昧性がこの範囲であり、体験を想定し不明確化する思考から体験を想定せず包括的に明確化する傾向であることを示している。逆に分布が見られない余白を考察すると、右上は［不明確化］［体験不想定］とまさに曖昧な概念で、もはや人間には認識不可能な空間思考であり未知化している。対極の左下は［明確化］［体験想定］という限りなく確定化する概念であるため、これらの余白に該当する建築家は本研究ではいないと判断できる。以上より空間的思考における曖昧性の概念とは［明確化—不明確化］［体験想定—体験不想定］という2つの見方の融合から捉えられると言える。

6. 実体空間の特徴及び年代的傾向　概念における実体空間のビルディングタイプの割合を考察すると、〈多様性〉の概念により実体化された建築は「公共施設」を始めとした非住宅の割合が高いことが明らかとなった（表2）。その空間は分節が少なく、ひと繋がりであることが特徴のひとつである。つまり多様なビジュアルの展開が鍵であり、特に外部への視線の取合いが重要と言える（図4）。一方で、〈不明瞭性〉では「住宅」が代表的ビルディンプタイプであり（表2）、その実体空間は体験上“よくわからない”という状態が創作されている。例えば坂本氏は印象づけられない建築を、篠原氏は圧倒されるような建築を実体化することで〈不明瞭性〉という認識されない空間を具体化している。この〈不明瞭性〉に比べて〈多様性〉の建築の開口部は約2倍であった。

そして曖昧性の概念の年代的傾向を見ると〈多様性〉には全体の約 80%の建築家が分布し、その中に比較的若い世代の建築家ほぼ全員が含まれた。それに対し〈不明瞭性〉には全体の約 7%の建築家が該当し、主に 60-70 年代から 2000 年までを中心に思考されている（表3）。

7. まとめ　本論では、空間の曖昧性とは何であるのかという主題を捉えるため、建築家の概念の相違から〈多様性〉〈不明瞭性〉という2つの概念の枠組みと《体験想定性》《体験不想定性》という思考の枠組みを明らかにした。その結果、近年の建築家を始めとして現代建築家の約8割が曖昧性を〈多様性〉として捉えており、建築界での曖昧性という表現の大半は主に〈多様性〉と言える。さらにその概念から具体化された建築は〈不明瞭性〉の建築に比べて開口部が多く、約7割が非住宅である傾向が特徴として示された。以上より、建築界における曖昧性の思考の一端を相対的に明らかにできたと考える。

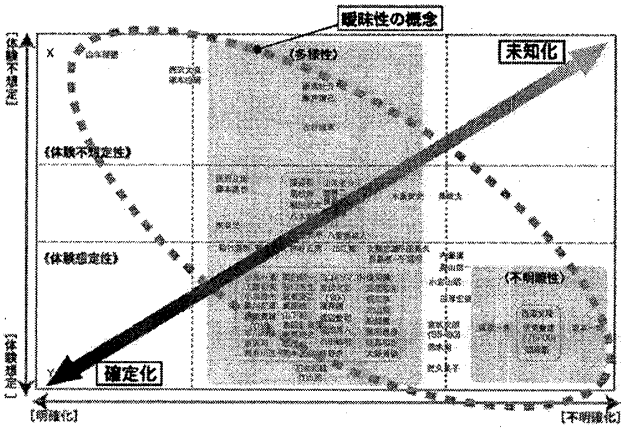


表 2. 〈不明瞭性〉〈多様性〉の建築におけるビルディングタイプの割合

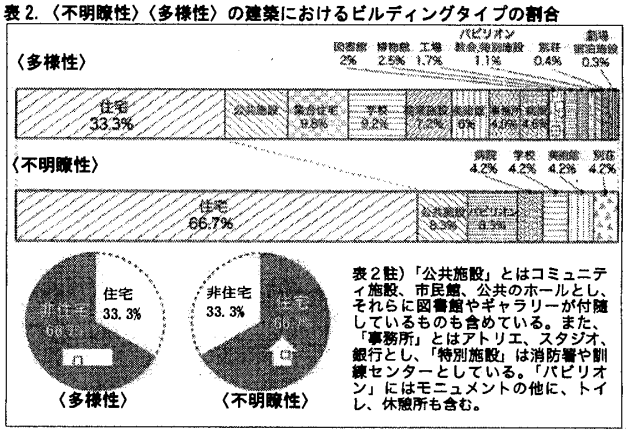


表2註）「公共施設」とはコミュニティ施設、市民館、公共のホールとし、それらに図書館やギャラリーが付随しているものも含めている。また、「事務所」とはアトリエ、スタジオ、銀行とし、「特別施設」は消防署や訓練センターとしている。「パビリオン」にはモニュメントの他に、トイレ、休憩所も含む。

図 4. 〈多様性〉の概念における実体空間の例

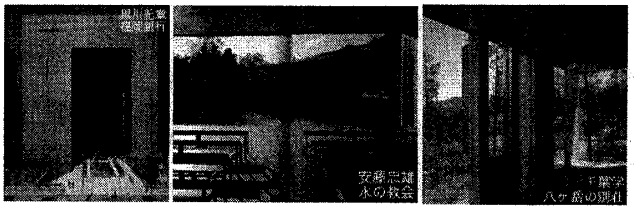


表 3. 代表的な建築家 18 名の概念の通時的傾向

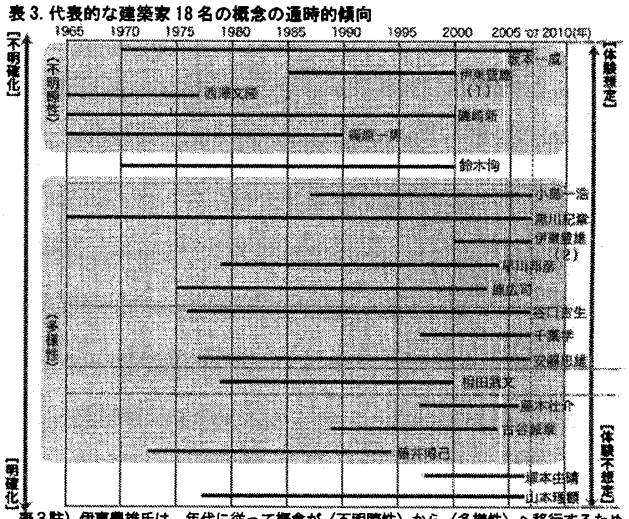


表3註）伊東豊雄氏は、年代に従って概念が〈不明瞭性〉から〈多様性〉へ移行するため（1）（2）と2つに分けて表記している。

* 北海道日建設計
** 室蘭工業大学建設システム工学講師

* Hokkaido Nikken Sekkei
** Assist. Prof, Dept. of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Muroran Institute of Technology

NII-Electronic Library Service